

G E N I C H I R O

文学じゃないかも

しれない症候群

高橋源一郎

朝日新聞社

T A K A H A S H I



高橋源一郎

文学じゃないかも



しれない症候群

朝日新聞社

高橋源一郎(たかはしげんいちろう)

小説家。1951年、広島県生まれ。横浜国立大学除籍。

主な小説に『さようなら、ギャングたち』(群像新人長編小説賞優秀作、講談社文庫、'85)、『ジョン・レノン対火星人』(新潮文庫、'88)、『優雅で感傷的な日本野球』(第1回三島由紀夫賞受賞、河出書房新社、'88)、『ペンギン村に陽は落ちて』(集英社、'89)、『惑星P-13の秘密——二台の壊れたロボットのための愛と哀しみに満ちた世界文学』(角川書店、'90)など。

エッセイ・評論集に『ぼくがしまうま語をしゃべった頃』(新潮文庫、'89)、『ジェイムス・ジョイスを読んだ猫』(講談社文庫、'90)、『追憶の一九八九年』(扶桑社、'90)、『競馬探偵の憂鬱な月曜日』(ミデアム出版社、'91)、『文学がこんなにわかっていいかしら』(福武文庫、'92)など。

翻訳に『ブライト・ライツ、ビッグ・シティ』(J. マキナーニー著、新潮文庫、'88)がある。

文学じゃないかもしれない症候群

1992年8月1日 第1刷発行

Printed in Japan

著者 高橋源一郎

発行者 木下秀男

印刷所 凸版印刷

製本所 青柳製本

発行所 朝日新聞社 編集・書籍第一編集室 販売・出版販売部

〒104-11 東京都中央区築地5-3-2

電話 03-3545-0131(代表) 振替・東京 0-1730

©1992 Genichirō TAKAHASHI

ISBN4-02-256489-X

定価はカバーに表示してあります。

文学って素敵……

映画やテレビやマンガより
ずっと素敵だと思うの

夢。思い出。狂気の恋。タブー。あこがれ。

ページをめくると
そこにはわたしの知らない世界が
広がってる

ああ
そんなことを
書くことができる人がいるなんて
……



「コルク張りの部屋に閉じこもり、
ホテル・リッツから舌平目のムニエルを
とりよせながら、死ぬまで
『失われた時を求めて』を
書きつづけたブルースト」

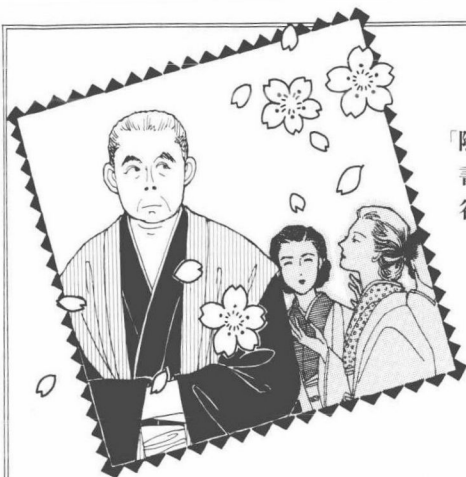


「天使の詩を書き、
指に刺さった薔薇の棘がもって、
死んでいったリルケ」



「美少女アリス・リデルを
ボートに乗せ、
ゆっくりと河を下っていった
午後の思い出を
『不思議の国のアリス』に
こめたルイス・キャロル——」





「陰翳に富んだ日本の美を
書き綴った
谷崎潤一郎」

「アルジェリアの強い日差し、
どこまでも広がる青い海と空の中で、
永遠の青年像を描いた
アルベール・カミュ」



「ジャズと禁酒法の二十年代、
恋と小説と終わることのない
パーティの間を駆け抜けた
フィッツジェラルド」



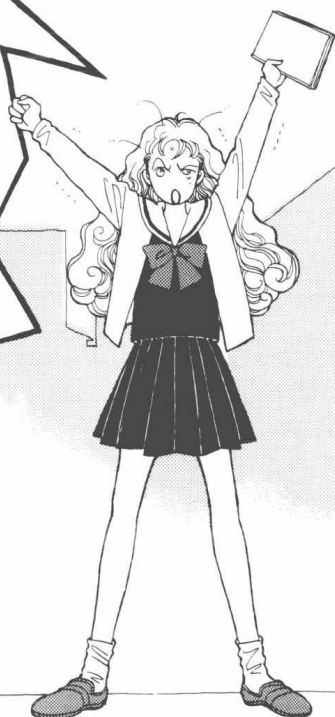
だから……



キラッ

かもしれない 症候群

高橋先生
そんな恰好で
町中を歩かないで
ください!!



文案 高橋源一郎
絵 松苗あけみ

文学じゃない



↑
意味はない。

↑
この中には
本、ノート、お菓子etc
入っている。

↑
家と職場が5分ぐらい
なんで歩いて通ってるんです。
この「恰好」。
冬なんかモットスコフ、
10ジャマの上にジャンパーと
コートとマフラーとスキー帽で
ランドセル背負って
明け方うろついてるから、
職務質問
されたりして。
お昼ごはん。



まあ先生、
漫画家と
おんなじ!

名作はつらいよ 11

「90春夏コレクション」を見る 19

幽霊の正しい描き方 39

文芸時評

ドン・キホーテのごとく 53 懐かしい文学 58

戦争とことば 63

なんだ、それは？ 68 「陰毛」と悲しみ 73

ひょうたん島のゆくえ 78

言文一致の運命 83 まる子とジョイス 88

私が光源氏です 93

クツと自伝 98 男前になってほしい 103

フェミニズムとモード 108

労働と人生 113 東スポ伝説と十九世紀バリ 118 「有害」コミック問題を考える 123

野蠻になりたい	128	終末から発生へ	133	偽モナリザの微笑	138
翻訳の量子力学	143	旅と恋愛の量子力学	148	ラカンのぬいぐるみ	153
「新人」とアレゴリー	158	起源のSFとSFの起源	163	未来へのメッセージ	168
「良心」について	173	少数派としぐさ	178	「文」の運命	183
「脱線」について	188	退屈な文芸時評	193	威張るな!	198

「正義」について 203

あとがき 224

初出紙・誌一覧 226

装画・原絵・マンガ……………松苗あけみ
装幀……………日下潤

文学じゃないかもしれない症候群

名作はつらいよ

「そんなくだらない小説を書くなんて、草葉の蔭で名作が泣いているぞ」といったのは、わたしである。いや、なにか特定の作品を指して糾弾したのではない。これは自戒の言葉として鏡に向かつて叫んだのである。で、後で考えたのだが、いったい草葉の蔭で名作は何をしているのだろうか。草葉の蔭といえは、死んで土に帰ったという意味である。「死んで土に帰った名作」。これでは名作とはいえ、フランシーヌの場合はあまりにも可哀そうだ。わたしの考えでは、名作といっても二通りあるのである。つまり、現役の名作と引退した名作である。太宰治なんかは、いまだに現役だ。清原。ちがうな。いまはちよつとスランプ。桑田。これかな。生まれてきてスイマセン。あのふてぶてしさ。桑田の恋人、アニータ・カステロはいつた。「真澄、脱いじゃってごめん」と。この人もそうとう太宰している。そういうわけで、太宰の作品はばりば

りの現役である。しかし、逆に引退した名作という人たちもいる。名作であるからには誰でも名前は知っている。だが、その選手が活躍するシーンをこの目でながめることはできない。なぜなら、引退してしまつたからだ。こういう人たちは時々「あの人はいま」コーナーなんかに出演し、そしていつの間にか、草葉の蔭へ引つ越されていたりするのだ。それはまづい。同じ野球……ではなく、文学を志すものとして、偉大な先輩のご恩を忘れてはならない。そういうわけで、わたしは最近、引退した名作を訪問するようになったのであるが、これがなかなかおもしろい！ なんとというか、引退した名作の方々には現役の名作にはないゆとり、というか、気品が感じられるのだ。なるほど、『斜陽』はすばらしい。あの主人公のかず子の優雅で繊細なモノローグ。

《革命を、あこがれた事も無かつたし、戀さへ、知らなかつた。いままで世間のおとなたちは、この革命と戀の二つを、最も愚かしく、いまはしいものとして私たちに教へ、戦争の前も、戦争中も、私たちはそのとほりに思ひ込んでゐたのだが、敗戦後、私たちは世間のおとなを信頼しなくなつて、何でもあのひとたちの言ふ事の反對のほうに本當の生きる道があるやうな氣がして來て、革命も戀も、實はこの世で最もよくて、おいしい事で、あまりいい事だから、おとなのひとたちは意地わるく私たちに青い葡萄だと嘘ついて教へてゐたのに違ひないと思ふやうになつたのだ。私は確信したい。人間は戀と革命のために生れて來たのだ》

伊達や酔狂で、こういうセリフは書けない。気概がある。硬骨漢である。これなら、戦車の上に乗って乗れる。日本文学にもエリツインはいたのである。とすると、石川淳はシェワルナゼか。もちろん、志賀直哉はゴルバチョフ。連邦解体の危機である。そう、太宰治の作品は現役の名作なのだ。いま読んでもまことに美味しい。だが、そこに問題がある。永遠の名作。それこそが現役の必須条件であることはわたしにも理解できる。しかし、永遠に読まれるということは、どの時代の人間にも好かれるということだ。逆にいうなら、どの時代の人間にも色目を使っているということだ。ここに、現役の名作の一大欠陥がある。八方美人、というか。そんな感じ。それに比べ、引退した名作たちは、その時代の読者にしか愛されない。読者が死ぬば、いつしよに草葉の蔭である。じつに、見上げた心根だ。純情である。かわいい。うぶ。そういう、引退した名作たちのはにかみの表情を、わたしたちは決して忘れてはならないのである。

いま、とつぜん思いついたのだが、現役の名作と引退した名作の間に、「干されている名作」というのもあるのではないか。名作界の篠塚である。「どうして使ってくれないのか、みんなもおかしいといってくる」と新聞記者に語って、巨人軍からペナルティを受けた篠塚のような名作。たとえば、『ドン・キホーテ』。『ドン・キホーテ』が「干されている名作」というと、うつそい、とお叱りを受けるかもしれないが、マルト・ロペールという人は、『ドン・キホーテ』

は世界でいちばん有名な書物だが、スペイン以外には読者はほとんどいない」といつているのである。いや、おれはちゃんと読んだぜ、と反論なさる方もいらつしやるだろうが、じつはそういう人もたいていダイジェスト版を読んだのではあるまいか。あの池内紀さんだって、原本は長くていやになつちやつたといつておられる。ダイジェストといつても、岩波少年文庫・牛島信明編訳は六百枚ぐらいある。原本は六倍。ざっと三千六百枚。これを書評しようとするの大変だ。不思議なのは、書評の原稿料は、書く原稿用紙の量には比例するが、読む本の量と無関係だということである。椎名桜子の小説と小島信夫の小説を同じ原稿用紙二枚で書評しても稿料が一緒では、だれも小島信夫の本の書評をしようとしなくなる。純文学がさびれるわけである。まあ、そういうわけで、『ドン・キホーテ』は世界一の有名人なのに、ほとんど誰も実物を見ていないことになる。「若手が台頭したのなら話もわかるが、そんなことはないし、ぼくはいま体の具合も悪くない」という『ドン・キホーテ』の訴えを聞いて、わたしは藤田監督ではないのでゴンザレスを二塁に使つたりせず、『ドン・キホーテ』を二塁に起用してみた。先月のことである。すると、『ドン・キホーテ』は充分現役で通用することがわかつたのである。だいたい、『ドン・キホーテ』は冗漫すぎるというのが通説になっているが、今回、スタメンに抜擢してわかつたのは、その冗漫さが魅力だということだ。登場人物たちはみんなおしゃべりばかりしている。関係者が偶然、全員、一箇所に集まつてしまう。ご都合主義である。冒険と遍歴の物語が聞いて呆れる。しかし、その長いおしゃべりにつきあつたものだけが、感動の大団